

氏名	小野 真由子 (オノ マユコ)
本籍	北海道
学位の種類	博士 (老年学)
学位の番号	博甲第 125 号
学位授与の日付	2024 年 3 月 19 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	高齢者の感謝の尺度開発とその応用例: 孤独感に対する影響

論文審査委員	(主査)	桜美林大学教授	杉澤	秀博
	(副査)	桜美林大学教授	渡辺	修一郎
		桜美林大学教授	長田	久雄
		筑波大学名誉教授	小玉	正博

論文審査報告書

論文目次

I. 背景	1
1. 高齢者にとって感謝の重要性.....	1
2. 先行研究から感謝の定義を整理.....	2
3. 高齢者の感謝の特徴—他世代との比較.....	4
4. これまで開発された感謝の測定指標.....	4
5. 尺度開発の到達点と課題.....	10
6. 感謝に着目した高齢者の孤独感解消の可能性.....	10

II. 本研究の目的と意義.....	12
研究1 高齢者における「感謝」の構成要素に関する質的研究.....	13
1. 目的.....	13
2. 方法.....	13
3. 結果.....	15
4. 考察.....	18
5. 限界と課題.....	20
研究2 高齢者用感謝尺度の開発.....	22
2-1 高齢者用感謝尺度の妥当性と信頼性の検証.....	22
1. 目的.....	22
2. 方法.....	22
1) 妥当性と信頼性の評価手順.....	22
2) 高齢者における「感謝」の操作的定義と質問項目の作成.....	22
3) 専門家による質問紙の内容的妥当性の評価.....	23
4) 高齢者による質問紙の内容評価.....	26
5) 項目の分布の確認.....	27
6) 尺度の妥当性と信頼性の検証.....	29
2-2 高齢者用感謝尺度の妥当性の再検証.....	36
1. 目的.....	36
2. 方法.....	36
3. 結果.....	37
4. 考察.....	37
研究3 高齢者の感謝が孤独感に及ぼす影響.....	38
1. 目的.....	38
2. 方法.....	38
3. 結果.....	39
4. 考察.....	39
5. 限界と課題.....	41
III. 総合考察.....	42
1. 本研究で得られた知見とその新規性.....	42
2. 本研究の共通課題と今後の展望.....	42

論文要旨

高齢者の感謝は加齢とともに訪れる様々な危機を乗り越え適応に至ること、人生を受容するプロセスに重要な役割を果たす心理として、豊かな人生の実現に欠かせないものである。先行研究では、感謝は自分にとって価値あるものを受けとったと認識することで生じるポジティブな感情と定義されており、行動までを含める場合もある。高齢者の感謝尺度については、多元的で、感謝の対象が限定されない尺度は開発されていない。開発された尺度の応用例については、孤独感への効果に着目する。孤独感とは社会参加、社会的ネットワークなどの社会関係が影響することが示されてきた。感謝についても高齢者の孤独感を低減させるという知見が少しずつ蓄積されてきている。感謝には現在の大切な人たちのみならずこれまでの人生で出会ってきた人達の大切さを再認識するとともに、ストレスfulな状況における精神的健康の悪化を緩和する機能もあると指摘されている。そのため、感謝は高齢者の孤独感を直接低減させるだけでなく、社会関係の希薄さという中での孤独感の増幅効果を低減する緩衝効果を発揮する可能性がある。しかし、妥当性、信頼性が確保された感謝の尺度を用いて、高齢者の孤独感の効果を検証した研究はない。

以上の既存研究の到達点と残された課題を踏まえ、本研究の目的は、第1に高齢者の感謝の概念構成を質的研究で明らかにする(研究1)、第2に質的研究で明らかにされた概念構成に基づき、感謝尺度を開発する(研究2)、第3には感謝尺度の応用例として、感謝の高齢者の孤独感に与える効果を、直接効果とともに、社会関係の希薄さが孤独感に与える増幅効果を緩衝する効果について分析する(研究3)、と設定した。

研究1では、東京都に居住する高齢者男女20名に対し、半構造化面接を行った。面接では、現在感謝していることのエピソード、先述した7つの生起要因にまつわる感謝のエピソード、感謝とはどのような気持ちだと思いか尋ねた。分析には質的内容分析法を用いた。分析の結果、コード化単位は23項目、文脈単位は9項目抽出された。さらに最終的に3カテゴリー(【価値あるものに気づく体験】【自己の内と外に向かう肯定的な気持ち】【他者への返礼行動】)に集約された。

研究2では、研究1の質的研究の結果明らかにされた3つの概念構成に基づき、以下のようなステップで尺度を開発した。第1ステップでは、下位因子として「価値の認知」16問、「感謝の源に対する気持ち」17問、「感謝の返礼行動」17問の合計50問を作成した。第2ステップでは、尺度の内容的妥当性の評価を、専門家6人と関東在住の高齢者6人によって行った。その結果、「感謝の返礼行動」を「報恩願望」に修正し、計44問の尺度を作成した。第3ステップでは、この尺度を用いて、東京都A

区の老人クラブの会員 95 人を対象に、天井効果・床効果さらに項目分析を行い、21 項目に整理した。第 4 ステップでは、この 21 項目を用いて、東京都 A 区の老人クラブの会員 500 人を対象に収束的妥当性、構成概念妥当性、信頼性を評価した。3 因子構造に基づき確認的因子分析をした結果、適合度が低く、この因子構造は支持されなかった。そのため、探索的因子分析を行い、新たな因子構造を探った結果、「報恩願望」、「恵みの受領」（「価値の認知」と「感謝の源に対する気持ち」に属する項目で構成）、「困難で得た恩恵」という 3 因子が抽出された。「困難で得た恩恵」については、ワーディングの問題から別途の因子が抽出された可能性があることから、「報恩願望」「恵みの受領」「困難で得た知恵」の 3 因子構造（14 項目で構成）と、「困難で得た知恵」を除いた「報恩願望」「恵みの受領」の 2 因子構造（12 項目で構成）について、確認的因子分析を用いて適合度を比較した。分析の結果、2 因子構造の適合度が高かったことから、最終的に「報恩願望」（6 項目で構成）、「恵みの受領」（6 項目で構成）の 2 因子構造の尺度とした。この尺度については、収束的妥当性も高く、内的一貫性も高いことが確認された。第 5 ステップでは、第 4 ステップの対象者が老人クラブに所属しており、結果の一般化に制約があることから、web 調査会社のモニターで 70 歳台、80 歳台の男女 50 人ずつ計 200 を対象に、構成概念妥当性と併存的妥当性を評価した。分析の結果、いずれの妥当性も高いことが確認された。

研究 3 では、上記の第 5 ステップのデータを用いて、感謝の高齢者の孤独感に与える効果を、直接効果とともに、社会関係の希薄さが孤独感に与える増幅効果を緩衝する効果の面から分析した。分析の結果、直接効果については支持されたが、緩衝効果については支持されなかった。

総合考察では、今後の課題として以下の 3 点を指摘した。第 1 に一般対象者を対象とした調査に基づき、尺度の妥当性・信頼性を検証すること、第 2 に本研究では尺度の概念構成が 3 因子であることは支持されなかったが、その理由を詳細に検討すること、第 3 に孤独感以外の高齢者のウェルビーイング指標を用いて感謝尺度の効果を、因果連関の検証を含め縦断調査を用いて検証することが必要であること。

論文審査要旨

感謝については、青年期や一般の人たちを対象にした尺度が開発されているものの、感謝の対象が限定されていたり、高齢者の感謝の特徴が反映されていないなどの課題があり、高齢者に特異的な感謝の尺度の開発が求められている。本研究の新規性は、高齢者に特異的な感謝の尺度を独自に開発したということのみならず、開発過程が尺度開発に必要な妥当な手続きに則っている点にある。すなわち、質的研究に基づき高齢者における感謝の構成概念を明らかにした上で尺度開発を行っていること、尺度開発の妥当性の検証は、内容的妥当性、収束的妥当性、併存的妥当性、構成概念妥当性の面から包括的に行っていること、併存的妥当性と構成概念妥当性については、老人クラブの会員に加えて、結果の一般化に制約はあるものの、より代表性ある web 調査

のモニターを対象に妥当性を追試していること、加えて、尺度にとどまらず応用例として、高齢者が直面している問題である孤独感の低減に、開発した感謝が効果を有するか否かについて検証している点でも新規性が高い。

しかし、以下の点での考察を深めることが必要との指摘がなされた。尺度開発では、構成概念妥当性に関しては質的研究に基づく 3 因子構造が支持されず、探索的な因子分析の結果に基づき 2 因子構造の尺度を開発している。しかし、尺度の因子構造については一層の理論的吟味と方法論的洗練が必要である。応用例については、孤独感のみでなく高齢者のウェルビーイングの他の指標に対してもその改善に効果があるか否かについて検討する必要がある。

以上のような課題はあるものの、本論文は博士論文としての水準を満たしており、合格と判定された。

口頭審査要旨

30 分の発表と 30 分の質疑応答が行われた。

高齢者に特異的な感謝尺度の開発を必要な手続きに基づき適切に行っている点が評価された。コメントとして以下のような指摘がなされた。孤独感のみではなく、高齢者のウェルビーイングを測定するための指標を包括的に設定し、それらに対する効果も検討する必要がある。応用例として社会関係の乏しさの孤独感に与える増幅効果を感謝が緩衝する効果を検討しているが、感謝が社会関係を拡大することを通じて孤独感の低減につながる可能性も検討する必要がある。提出時の題目である「高齢者における感謝の研究；感謝の尺度開発と孤独感に対する影響の検討」が内容を適切に表現していないとの指摘があり、口頭審査の場で修正を行わせた。質問については、尺度開発では構成概念妥当性に関しては質的研究に基づく 3 因子構造が支持されず、探索的な因子分析の結果に基づき 2 因子構造の尺度を開発している。2 因子構造で妥当か否かについての考えが質された。それに対して、2 因子構造が妥当性あることを支持する文献があるため、それに基づき 2 因子構造が妥当性あるとしたものの、理論面さらにワーキングなど方法論的な問題も考えられることから、今後の検討課題としたいとの回答がなされた。さらに、交互作用の分析に関する統計解析方法について質された。これに対してもきちんとした回答がなされた。

以上、提出された学位請求論文は学位請求論文としての水準を満たしており、内外の先行文献を十分に渉猟するとともに、研究の方法論も妥当である。よって、口頭試験の結果は、主査・副査が全員一致して合格であると判定した。